

人は「変わる」ということに2つの面を持つているようだ。基本的に人は保守的で、「変わる」ことに抵抗感を持つている。しかし目の前に今までとは違うものが現れ、それを素晴らしいとか、面白いと感じると、手に入れる努力を惜しまない。そして首尾よく獲得すれば、喜びこそすれ抵抗感は極めて低くなる。

一般的に保守派は伝統を守り、革新派は新しいものに挑戦するイメージがあるが、いま日本社会の現実を見ると、変えようとする保守派と、変えさせないとする革新派がせめぎ合っている。道理は一筋縄でいかないところがまた面白い。

学生の頃、今はこうだがこれはいつか逆転して将来はこうなっているだろう、などと想像することがよくあった。もとより面白半分の感覚だったが、日月を経てその夢想の幾多がいまや現実化していることに驚くと同時に、若き日の「我が慧眼」にもひそかに得心している。もっ

「変える」を楽しむ



とも、「日が西から昇るとどうなる？」はいまだ実現していないが。

しかし、学生時代の夢想を生かして、仕事で「日を西から昇らせる」のに成功したことがある。

合併企業にいた時、初のカラー複写機を発売することになり、私は販売計画部隊に「日は西から昇るぞ」と号令をかけた。普通の販売計画なら、量的には関西地区よりも関東地区の方が多くなる。しかし関西で生まれ育った私の肌感覚で、関西の方が先に売れると直感した。半信半疑の販売計画部隊に「日を西から昇らせろ」と指示した結果、我々の太陽は見事に西から昇った。実は繊維や織物商が多い関西の方がカラー複写機のニーズが高いと読んだからだが、種明かしをすると実もふたもないからこれは内緒だ。

さて、本題の「変わる」ということについて。企業と学校は異なる、とよく言われる。確かに、変わった、変わらなかった

たという結果が現れるのは企業の方が早い。学校は変化が見えるまでに時間がかかるし、変わったかどうかよく分からないことがある。

しかし、歴史を振り返れば世界は不易ではあり得ず、社会も人も常に転変する。変わって良かったこともあれば、そうでないこともある。変わって良くなかったのなら、また変えればいい。

現状を変えるには、何を、なぜ、どんな形にしたいのか、絵姿を明瞭に描くことが求められる。その絵は、直接関係する人はもちろん、周りからも「いいね!」と共感されること。これが肝要だ。

対話力が重要になる。人は相手の話を聞くことによって、自らのストーリーを変化させる。その際、人の脳は「快」の状態になるといふ。脳が「快」になると、人は活発で前向きに働くよう仕組まれている。「不快」では夢は膨らまない。

10人で変わることの必要性を話し合っ

宮原 明 ● 学校法人関西学院理事長

たでしょう。まず1人か2人が自分の考えに共感し、「チェンジリーダー」になってくれることがKFFS (Key Factor for Success) の最初のステップだ。

あとは3人目、4人目、5人目と共感者を増やす。10分の5の共感者ができ、自分を含むマジョリティーが形成されれば事は動く。卓抜した対話力がリーダーに求められるのは、言うまでもない。

しっかりとプランニングと実行プロセスの策定も、忘れてはならない。日本人はこのプログラム・マネジメントがあまり得意ではないだけに、まだまだ欧米に学ぶことがありそうだ。

世の変化に対して、私立学校はもっと柔軟性があるべきだと思うが、現実には必ずしもそうっていない。私の職場人生を振り返ると、「変わる」ことを先読みして「変える」仕事が多かった。変わらなと言われたものを「変える」楽しみは、私の活動力の源泉でもある。